

Newsletter of Japanese Coral Reef Society

contents

page

連載1:サンゴ礁研究 ハイライト	2
書評:海洋大異変 日本の魚食文化に迫る危機	2
元田 茂先生書籍配布案内	3
お知らせ 1~3 (学会賞の募集案内、次回大会案内など)	3
サンゴ礁ウィーク2016 実施報告	4-5
ワークショップ報告「サンゴの分類と同定2016」	5
連載2:サンゴ礁のきずな -2-	6
お知らせ 4 (第13回国際サンゴ礁シンポジウムの開催)	6



連載1 サンゴ礁研究 ハイライト

公表論文

Genetic differentiation and connectivity of morphological types of the broadcast-spawning coral *Galaxea fascicularis* in the Nansei Islands, Japan
Yuichi Nakajima, Yuna Zayasu, Chuya Shinzato, Noriyuki Satoh, Satoshi Mitarai
Ecology and Evolution (doi: 10.1002/ece3.1981)

ハイライト:

アザミサンゴは雌雄異体の放卵放精型サンゴで、刺胞の形態で2タイプに分けられ、ミトコンドリアDNAタイプ(LまたはS)とも関連していることが知られています。本研究では、遺伝マーカーでアザミサンゴの集団遺伝解析を行い、奄美・沖縄・宮古・八重山でタイプ間の遺伝分化、タイプ内の遺伝的多様性と遺伝分化を評価しました。510群体のアザミサンゴのうち、306群体がL、204群体がSで、Lのうち11群体は通常とは異なるタイプ(L+)でした。L+はLやSとは遺伝的に大きく分化しており、群体の形態もチビアザミサンゴなどの近縁種とは異なっているため隠蔽種の可能性が示されました。LとSのどちらも高緯度で遺伝的多様性が減少しておらず、放卵放精による幼生分散により遺伝的多様性を

維持していると考えられます。タイプ内でも地域間で遺伝分化が見られ、その要因として幼生の発達が早く定着までの期間が短いことなどがあげられます。

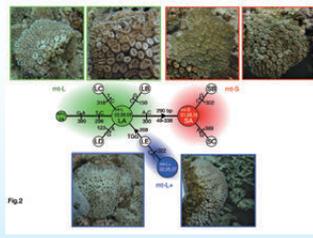


図: それぞれのタイプの形態およびミトコンドリアDNAハプロタイプ

✉ 連絡先: 中島 祐一 (Yuichi Nakajima)

yuichi.nakajima@oist.jp

公表論文

Shell productivity of the large benthic foraminifer *Baculogypsina sphaerulata*, based on the population dynamics in a tropical reef environment.
Kazuhiko Fujita, Maki Otomaru, Paeniu Lopati, Takashi Hosono, Hajime Kayanne
Coral Reefs 35: 317-326

ハイライト:

太平洋の環礁の島々は有孔虫の砂でできていると言っても過言ではありません。本論文は、海面上昇問題で注目されているツバルの島や砂浜の主要成分である星砂の年間生産量について推定した論文です。本研究は、ツバルでのSATREPSプロジェクトの一環として行われました。このプロジェクトでは、有孔虫を用いて生態学的に砂浜の再生を目指しており、有孔虫の生産量を正確に把握する必要があります。これまでも有孔虫の生産量に関する研究は多くあるのですが、意外と熱帯域の有孔虫の生産量の研究は少なく、また論文によって様々な方法で見積もられており、どの方法が尤もしい値なのか検討されていませんでした。そこで、現地の共同研究者に2年間毎月試料採取してもらい、

研究室の学生に卒業で分析してもらいました。得られた個体群動態に基づいて、生産量を4つの方法で見積もって比較したところ、生長量や死亡率に基づいた方法が尤もらしく、その他の簡易的な方法は過大・過小評価されていることがわかりました。本論文が、ツバルをはじめとした環礁の国が気候変動の適応策を考える基礎データとなれば幸いです。



写真: ツバルの礁原に分布するホシスナ

✉ 連絡先: 藤田 和彦 (Kazuhiko Fujita)

fujitaka@sci.u-ryukyu.ac.jp

書評

地球に暮らす生物のうち、自らの手で環境を改善できるのは私たち人類だけであり、海洋環境の保全は人類共通の重要テーマの一つとなっています。しかし、私たちが海洋異変の危機に直面しているという実感に乏しいのが現状です。

環境問題について考える際、自然科学的環境学と社会科学的环境学の二つのアプローチがあります。筆者は朝日新聞の科学記者として、前者の視点から十数年にわたって「水産・海洋科学」をテーマとして取材を続けてきました。本書は、多様な海洋生物を脅かしている乱獲や開発、汚染などに加え、「温暖化」と「酸性化」、「外来種問題」といったキーワードに焦点を当て、筆者の綿密な取材成果が集大成となった労作です。著者は研究者と一緒に調査地に足を運び、各地の現場を訪ね歩いて取材されたため、本書からはその最前線に迫る並々ならぬ意気込みが伝わってきます。例えば、氷の浮かぶ南極海に潜水しての取材や、時には赤道直下のガラパゴス諸島に足を運び、現地の人々とのやり取りと現状を取材しています。このように、「自分の目で見たものを記事にする」という著者の信念が、本書を読み進めていくとともに伝わってきます。そのため、あたかも私たちが取材の現場に赴いているような感覚になります。

本書を読んでいくと、日本の近海で起こっている異変について、いかに私たちが無関心であったのかを再認識させられます。例えば、「ハマグリ」を

例とし、生態系の攪乱を引き起こす可能性がある「外来種」が普段の食卓に上っているようです。サンゴ礁の異変についても紹介されており、「白化現象」については、最新の知見を取り入れながら分かりやすく解説されています。また、オニヒトデといった造礁サンゴを食害する生物の紹介や赤土の流入、病気など、サンゴ礁を脅かす様々な原因についてもまとめられています。さらに、サンゴを人の手で増やす技術についても紹介されています。「挿し木」のように枝状サンゴを切り取り、移植する方法とは異なり、卵から増殖させる技術やその開発過程のエピソードについても書かれています。本書ではあまり触れられていませんが、サンゴ礁を劣化させる原因として過剰な環境開発や農地開発が指摘されています。例えば沖縄県では、観光ビジネスの発展とサンゴ礁保全の両立といった、人類と海洋生物の共存に関するテーマが、今後のサンゴ礁域の環境問題を議論する上で重要となりそうです。

海洋環境問題の原因と現状については学校等で学ぶものの、私たちが海の生物の異変について、日常生活の中で考える機会は少ないのではないのでしょうか。まずは自身の知識を深め、海洋の環境問題についてきちんと知り考えたい、あるいは、最新の知見を得たいという方にとって、本書は最良の入門書となります。



タイトル:
海洋大異変
日本の魚食文化に迫る危機
著者: 山本 智之

出版社: 朝日新聞出版
ISBN: 9784022630407
ページ数: 376 ページ
定価: 1728 円 (税込)
発売日: 2015 年 12 月 10 日

書評者: 大野 良和
琉球大学・理工学研究科海洋環境学専攻
日本学術振興会特別研究員 DC 2

元田 茂先生 書籍配布案内

北海道大学プランクトン研究室の初代教授で、若き日にパラオ熱帯生物研究所でさんご礁の研究に活躍された元田 茂先生の著書には専門書だけでなく、随筆集「波のまにまに」や画集「船とみなと第一集」「船とみなと第二集」などもあります。昨年冬からの整理作業で、これらの書籍が多数見つかりました。そして、先生を知っておられる人々や学会会員にアナウンスをし、発送手数料などの実費にて希望者にお配りするのが良いだろうということになりました。

- 波のまにまに 元田 茂 随筆集 大森 信編(1998)文治堂書店 300pp.
- 船とみなと 元田 茂 画集 第一集(1991)文治堂書店 63pp.
- 船とみなと 元田 茂 画集 第二集(1992)文治堂書店 64pp.

「波のまにまに」には先生のパラオ熱帯生物研究所時代を偲ばせる「かつて在りしパラオ熱帯生物研究所—その使命と成果」や「パラオの奇人変人たち」などの名文が含まれています。

これら3書籍の配布事務局は北大PLO通信会事務局です。配布ご希望の方の連絡方法は以下の通りです。

- 郵便振込用紙(加入者名「元田茂先生書籍頒布事務局」口座記号番号: 02790-9-48653)に、連絡先(住所、お名前、電話番号)を記載下さい。書籍は、この住所にお送り致します。また、内容問い合わせをすることもあるかと思しますので、郵便振込用紙には電話連絡先もご記入下さい。
- 郵便局にて、発送手数料として1,000円を、上記の郵便振込用紙を使ってお振り込み下さい。送料は、上記3冊を1セットとして、1セット1,000円とさせていただきます。複数セットをご希望の際には、郵便振込用紙の通信欄に希望セット数をご記載の上、そのセット数分の送料をお振り込み下さい。
- 事務局で内容を確認後、書籍を発送させていただきます。到着まで2週間ほど見て頂きますよう、お願い申し上げます。

本件に関するお問い合わせは、以下までお願いします。

大森 信
e-mail:makomori@sk2.so-net.ne.jp
〒251-0026 藤沢市鵠沼東2-3-315



information

お知らせ

お知らせ1: 学会賞・川口奨励賞の公募

学会賞委員会委員長 井龍 康文

日本サンゴ礁学会では、平成28年度日本サンゴ礁学会賞授賞候補者および日本サンゴ礁学会川口奨励賞(以下、川口賞と略)授賞候補者の推薦を公募いたします。

平成28年度日本サンゴ礁学会 サンゴ礁保全活動奨励賞の公募

サンゴ礁保全委員会委員長 中野 義勝

1. 学会賞

学会賞は、国内外のサンゴ礁に関連する研究、調査を対象とする優秀な業績を挙げ、かつ学会へ多大な貢献をした学会員に贈られるもので、受賞者には今年秋の総会において、賞状が授与されます。推薦者の方(自薦も可)は、応募書類一式を本年5月27日(金)までに(当日消印有効)、郵送あるいはメールの添付書類にて井龍宛にお送り下さい。応募書類は返却致しません。選考は学会賞受賞候補者選考小委員会で行い、採否の通知は、7月末までにメールにてお知らせします。受賞者には学会大会において受賞講演を行っていただくとともに、原則として日本語で日本サンゴ礁学会誌に受賞記念論文をご執筆いただくことになっております。

2. 川口賞

川口賞は、国内外のサンゴ礁に関連する研究、調査を対象とする優秀な業績を挙げた若手の学会員に贈られるもので、受賞者には今年秋の総会において、賞状、メダル、および賞金が授与されます。賞の対象となる若手の年齢は、平成28年11月末日に38歳以下の方とします。推薦者の方(自薦も可)は、応募書類一式を本年5月27日(金)までに(当日消印有効)、郵送あるいはメールの添付書類にて井龍宛にお送り下さい。応募書類は返却致しません。選考は川口賞受賞候補者選考小委員会で行い、採否の通知は、7月末までにメールにてお知らせします。受賞者には学会大会において受賞講演を行っていただくとともに、原則として英語でGalaxea, Journal of Coral Reef Studiesに総説をご執筆いただくことになっております。

サンゴ礁保全委員会では、平成28年度日本サンゴ礁学会サンゴ礁保全活動奨励賞候補者の推薦を公募いたします。多くの方々からの応募をお待ちしております。推薦者の方(自薦も可)は、応募書類一式を本年9月30日(金)までに(当日消印有効)、郵送あるいはメールの添付書類にてサンゴ礁保全委員長中野宛にお送り下さい。応募の詳細は日本サンゴ礁学会HPをご覧ください。

サンゴ礁保全活動奨励賞は、サンゴ礁保全あるいは保全につながるさまざまな活動を行っている個人、NPO・企業・研究室・学校などの団体に贈られるもので、受賞者には今年秋の総会において、賞状が授与されます。

日本サンゴ礁学会功労賞の推薦募集

日本サンゴ礁学会功労賞は、サンゴ礁についての保全、教育、普及活動、研究支援に対する貢献が格別に顕著な個人会員または団体会員に贈り、その功績を表彰することを目的としています。会長による推薦を評議員会に諮り、評議員総数2/3以上の賛成で受賞者を決定します。学会員であればどなたでも会長に推薦できますので、随時適任者をご推薦ください。

☞ 応募書類および送付先の詳細は日本サンゴ礁学会HPをご覧ください。

お知らせ2: 各種変更届

この春から新生活が始まった皆様、所属・住所等変更、退会手続きの際は毎日学術フォーラムへお知らせください。方法は学会web(<http://www.jcrs.jp/>)の「入会・会員情報変更方法」をご覧ください。また、学会のメーリングリスト(sango-ML)にメールアドレスの登録されていない方も、同様の方法で、MLへの登録を行うことが出来ます。イベントの案内やサンゴ礁の貴重な情報がMLでやりとりされていますので、お勧めしております。

お知らせ3: 日本サンゴ礁学会 第19回大会

共催: 琉球大学
第19回大会実行委員長 山城 秀之
2016年12月2日(金)~12月4日(日)
会場: 沖縄タイムスホール

2016年は、6月に国際サンゴ礁シンポジウムがハワイで、また直前の11月に国際動物学会・日本動物学会(共同開催)が沖縄で開催されるため、日本サンゴ礁学会19回大会は省エネ型にしたいと考えています。県外からの参加者の交通および宿泊に利便性の良い那覇の中心地の沖縄タイムスホール(モノレールで那覇空港から13分の「県庁前駅」から徒歩5分)で開催いたします。皆様のお越しを心よりお待ちしております。

サンゴ礁ウィーク2016

実施報告



サンゴ礁ウィーク2016+ 「沖縄のサンゴ礁の大規模開発を考えるワークショップ」開催報告

沖縄県サンゴ礁保全推進協議会会長・サンゴ礁学会サンゴ礁保全委員会委員長 琉球大学熱帯生物圏研究センター 中野 義勝

サンゴ礁ウィーク2016

多くの主体の参加によってたくさんの市民の皆さんのサンゴ礁への関心を喚起することを目的として、サンゴの日(3月5日)を中心に沖縄県サンゴ礁保全推進協議会が主催する「おきなわサンゴ礁ウィーク」が3年目を迎えた今年、さらに全国に関心が広がるように「サンゴ礁ウィーク」と改称して、多くの賛同を得て開催されました。日頃から継続されている活動を軸に、この週間に開催されました様々な企画の主催者のみなさまのサンゴ礁保全への見識と心意気の高さには敬服いたします。23の参加型イベントでは各地で、サンゴ礁の海辺から海上までの幅広いフィールドを体験し、保全に携わる現場の方々やサンゴ礁を学ぶ専門家やサンゴ礁を愛して止まない多くの人材と交流しました。東京での開催を含めた4つのシンポジウム・ワークショップと展示会では、サンゴ礁の今ある姿を理解し、現状と将来を考える機会となりました。私のサンゴ礁イメージ展では、サンゴ礁に触れたときの感動を写真や絵画を通じて自

ら発信することもできました。また、先行する石垣島サンゴ礁ウィークでは12のイベントを擁して賑やかに開催されました。今後とも、多くの市民のみなさまにサンゴ礁に触れる機会としてご活用いただき、よりサンゴ礁を身近に感じ、考え、行動していただけるよう、この週間の輪がさらに広がるよう今後とも働きかけてゆきたいと思っております。

(<http://coralreefconservation.web.fc2.com/sangoweek/sangoweek2016.html>)

日本サンゴ礁学会サンゴ礁保全委員会主催 ワークショップ

「沖縄のサンゴ礁の大規模開発を考える」
 日時:3月12日(土)14:00~16:30
 場所:TKR品川カンファレンスセンター
 共催:国立環境研究所
 基調講演:五十嵐敬喜 法政大学名誉教授
 「公有水面埋め立てと海の世界」

学会でも扱いに苦慮する課題である「沖縄のように現代社会の人間活動と不可分のサンゴ礁域における社会資本整備において合理的な保全と共存の道を探る。」ことを趣旨として開催したワークショップでは、研究者ばかりでなく市民・企業人も交えた活潑な意見交換が出来ました。今後も保全委員会ではこのような機会を設けていきたいと思っております。当日の様子は月刊ダイバー5月号にも掲載されます。



写真：ワークショップの様子

サンゴ礁ウィークでのイベントに関する報告記事

日本サンゴ礁学会若手の会 琉球大学理工学研究科・博士前期課程 喜瀬 浩輝 hkmllsea@yahoo.co.jp

サンゴ礁ウィーク2016の期間中の最後の週末となる3月12日・13日に、若手の会有志らによる「沖縄のサンゴ礁研究最前線～安心して下さい、ボクたちがいます～」と題したイベントを沖縄県立博物館・美術館にて実施いたしました。本イベントは、「サンゴ礁研究をもっと身近に感じてもらう」ことを目的とし、常設展示と高校生・予備校生らとの交流会を実施いたしました。常設展示では、サンゴ礁の生き物展示や顕微鏡下でのサンゴのポリブ観察、生き物に名前がつくまでの手順を記したコーナー、若手研究者らの研究紹介ポスターを設置しました。

訪れた子どもたちは、初めて見るサンゴ礁の生き物やサンゴのポリブを夢中になって見入っていました。また、生き物に名前がつくまでの手順を記したコーナーでは、「名前をつけるまでってこんなに大変なんだ」というお声を多く頂きました。若手研究者との交流会には、沖縄県内の高校生・予備校生11名が参加し、OIST所属の研究員1名、琉球大学の大学院生7名、東京大学および琉球大学の学部生3名らとともに、大学生生活・進路相談・サンゴ礁研究を話題に交流を深めました。また、今年度の交流会から、サンゴ礁研究を身近に感じ

てもらおうためのワークショップを実施しました。今回は研究活動のスタートとも言える「疑問に思うこと」を体験してもらおうために、お題として用意した架空の生き物について、参加者・若手研究者が各自の視点から考えた疑問を列挙してもらいました。その後は出てきた疑問を分類し、それをもとに熱い議論が繰り広げられました。

今回のイベントを通して、サンゴ礁およびそれに関わる研究者の情報発信を様々な角度から行い、普段はサンゴ礁研究に関わる機会の少ない沖縄県民の皆さまにサンゴ礁研究の魅力を知って頂くことができました。また、交流会に参加した若手研究者としては、高校生らの柔軟な発想や疑問から新たな視点を得ることができ、自身の研究について見直す機会となりました。今後もサンゴ礁研究者と沖縄県民の皆さまが交流できる機会を設けるために、サンゴ礁ウィークのイベントをこれからも継続して行いたいと考えています。来年のサンゴ礁ウィークもぜひ楽しみにしてください。当日の様子を日本サンゴ礁学会若手の会のブログで紹介しています!

<http://goo.gl/KYn6Wd>



写真1：交流会で熱い議論を繰り広げている様子



写真2：サンゴのポリブや有孔虫の観察に夢中な子どもたち

シンポジウム「身近な海が温まったらどうなるの？魚は？サンゴは？」

宮崎大学テニュアトラック推進機構 安田 仁奈 ninayausda@gmail.com

サンゴ礁ウィークのイベントの一環として、国連生物多様性の10年市民ネットワーク、日本サンゴ礁学会サンゴ礁保全委員会、国立環境研究所が主催のシンポジウム「身近な海が温まったらどうなるの？魚は？サンゴは？」が2016年3月12日(土)にTKP品川カンファレンスセンターにて開催され31人が集まりました。このシンポジウムでは、温暖化にともなう海の変化と、人々が実際に日常でどう対処するべきかに関する提案が話されました。講演1では、筑波大学下田臨海実験センターの和田茂樹さんから「海が温まったら、海の生きものはどうなるの？」というタイトルで、海洋酸性化に関する説明と、現在行われている海洋酸性化に関する研究事例のレビュー、そして、和田さんが行っているCO₂シープに関する研究紹介が説明されました。多くの生物が酸性化によって影響を受けることは実験室内ではわかりつつあるものの、将来予測を行うには、実験室とは異なる、ゆるやかな酸性化に対する生物の順応、実

際の生態系における生物間の相互作用を評価する必要性に直面しています。このような中、式根島では世界でも珍しい、比較的酸性度の高い海域(CO₂シープ)が存在するため、未来の海を予測するのに役立つと期待されていることが紹介されました。講演2は宮崎大学の安田によって「サンゴを追いかけるサンゴ食生物たち」というタイトルで行われ、サンゴを食べるオニヒトデも日本において温暖化にともない北上していること、温帯域の大量発生が激化していること、文献調査により、沖縄本島の西海岸の大量発生あとに日本各地で大量発生が起きやすいことが紹介されました。最後に講演3「都会に住むわたしたちができることは何だろうか？」はコーラル・ネットワークの宮本育昌さんが発表され、地球規模生物多様性概況第4版において、COP10で決まった愛知ターゲット10「2015年までに、気候変動又は海洋酸性化により影響を受けるサンゴ礁その他の脆弱な生態系について、その生態系を悪化させる複

合的な人為的圧力を最小化し、その健全性と機能を維持する」の中間評価として、陸上由来の汚染や観光により以前よりも悪化しているという悲しい現状とともに、30の日常的にできること、が説明され、「みんなにサンゴ礁を好きになってもらうこと」が特に重要であるだろうと話されました。



写真：シンポジウムの様子

サンゴワークショップ「サンゴの分類と同定2016」開催報告

(一財) 沖縄美ら島財団 総合研究センター 永田 俊輔 sh-nagata@okichura.jp <http://churashima.okinawa/ocrc/>

(一財) 沖縄美ら島財団総合研究センターでは、平成28年3月17日(木)から20日(日)の4日間、サンゴワークショップ「サンゴの分類と同定2016」を開催しました。本講座は、日本近海に生息するとされる約80属の有藻性造礁サンゴ(以下、サンゴ)の属レベルの分類・同定スキルの習得を目指すワークショップです。近年の分子系統解析手法により、大幅に変更されたサンゴの分類体系と従来の体系を対比させ、約800点のサンゴ骨格標本を詳細に観察して学習しました。

今回はサンゴに興味をもつ学生を始め、環境調査や環境教育に従事する15名の方々にご参加いただきました。当財団参与の西平守孝が講師を務め、科ごとに、含まれる属の特徴を解説した後、ルーペや顕微鏡で骨格の形態的特徴を観察しました。参加者は観察した特

徴をスケッチなどで整理し、特に分類・同定が難しい属のサンゴについては、参加者同士で意見交換を交えながら見分けるポイントを探していました。また講座の間には、参加者によるサンゴ礁研究の紹介や盛んなサンゴ談義もみられたことから、この講座が良い交流の機会になったようです。

ある参加者からは、「多くの標本を一度に観察でき、とても有意義な時間でした。」というご意見がありました。本講座で学んだスキルを今後の活動に活かしてもらえると嬉しいです。平成28年度も本講座の開催を予定しています。サンゴの属レベルの分類・同定スキルを身に付けたい!という方はぜひともご参加ください。みなさんのご参加をお待ちしております。



写真1：観察している様子



写真2：修了証をもって記念写真



ところ変われば、ところ変われど？

琉球大学 名誉教授 土屋 誠

無数のとげを持ち、ミドリイシ類に覆いかぶさっているオニヒトデの印象は強烈だ。やや古い話であるが、1980年代の後半、タイのプケット海洋生物センターを訪問し、奇妙なおニヒトデを観察した。水族館で飼育しようと準備をしていたオニヒトデの色は私たちが通常沖縄で見るとは明らかに異なっており、紫色をしているのである。専門家の中では既にオニヒトデの形質について様々な検討が加えられていたことを知ったが、これらは別種なのであろうか？ そうであれば分布域の重複はあるのだろうか。

最近の分子生物学的研究によるとオニヒトデは4つのグループに分けることが出来るらしい。私たちになじみが深い太平洋域に広く分布するグループ、インド洋の北側に分布するグループ、インド洋の南側に分布するグループ、紅海に生息しているグループの4つである。私がプケットで見たのはインド洋の北側に分布するグループに属する個体ようだ。

紫色のオニヒトデを海水から取り上げてみると共生している小型のエビが泳ぎだす。このエビもまた紫色であった。

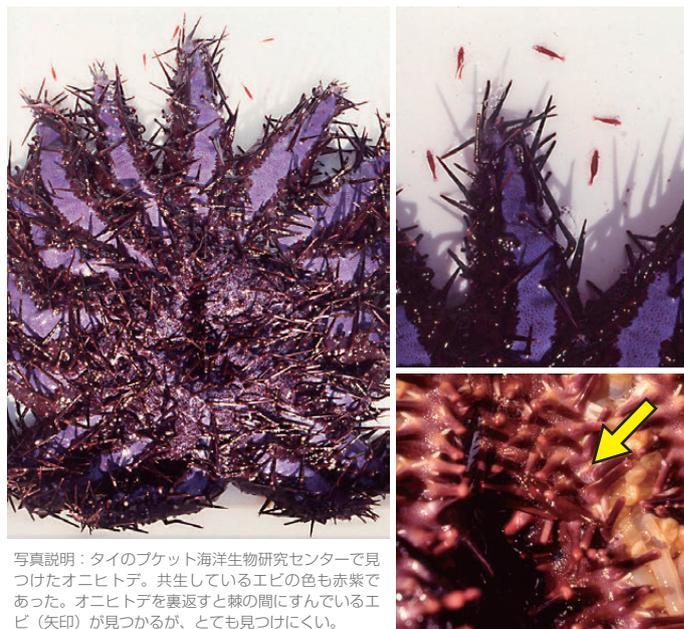
オニヒトデたちのきずなはどのようなものなのだろうか、最新の情報について専門家の話を勉強したいものだ。

ハナヤサイサンゴを食べようと接近してきたオニヒトデに対して、サンゴガニ類が攻撃をしかけて撤退させる現象は良く知られている。以前、友人が熊本県天草の牛深周辺にはハナヤサイサンゴが多産していることを教えてくれた。またオニヒトデは確認されていないという情報も届いた。熊本までオニヒトデを持参し、水槽に入れたハナヤサイサンゴの隣に置いてみた。たちどころにサンゴガニ類がハナヤサイサンゴの周辺に出てきてオニヒトデのとげを切り始めたので、オニヒトデを撃退する習性を有していることが確認できた。

夜も更けたころ、オニヒトデを別の水槽に移して実験を終了した。翌朝水槽を見て驚いた。ハナヤサイサンゴの表面にサンゴガニたちがハサミを広げて死亡していたのである。オニヒトデの体から何らかの物質が水槽中に浸み出しており、サンゴガニたちが一晩中興奮状態であったため、疲労して死亡したのではないかと話し合っ

ていた。残念ながらこのときの写真がない。当時はフィルムを現像して見なければ写真の出来がわからなかった時代である。撮影に失敗していたことを知ったのは何日か経過してからであった。

オニヒトデ、ハナヤサイサンゴ類、サンゴガニ類の3者が共進化したのではないかと考えられている。カリブ海にはこれらのどれも存在しないことがひとつの根拠になっている。生物たちは不思議なきずなを持っている。



写真説明：タイのプケット海洋生物研究センターで見つけたオニヒトデ。共生しているエビの色も赤紫であった。オニヒトデを裏返すと棘の間にすんでいるエビ（矢印）が見つかるが、とても見つけにくい。

information お知らせ

お知らせ4: 第13回国際サンゴ礁シンポジウム開催のお知らせ

東京大 樋口 富彦

2016年6月19日から24日まで、ハワイ州ホノルルのコンベンションセンターにおいて第13回国際サンゴ礁シンポジウム(13th International Coral Reef Symposium)が開催され、世界中約70の国と地域からサンゴ礁関係者が一堂に会します。

☞ <http://sgmeet.com/icrs2016/default.asp>

オーストラリアのケアンズで行われた前回大会から早4年が経ちました。今大会でも日本から多くのサンゴ礁研究者が参加し、多くのセッションでオーガナイザーを務めることになっています。セッション数は、約80件と非常に多いのが今大会の特徴です。

☞ <https://sgmeet.com/icrs2016/sessionlist.asp>

日本サンゴ礁学会からは、若手研究者・大学院生への渡航支援が行われます。支援採択者、および、大会開催中の授賞式の情報は、学会Webページ(<http://www.jcrs.jp/wp/?p=3762>)で、ご覧いただけます。

今回の大会テーマは、“Bridging Science to Policy”です。世界中の研究者を交えての議論を通じて、サンゴ礁の科学と政策・方針にどのような橋が架かるのか興味深いところです。今年はハワイやグレートバリアリーフなど、世界中かつてない規模で高水温によるサンゴの白化現象が確認されています。個人的には世界中の白化の現状を議論できればと思っています。

また、日本サンゴ礁学会ではブース展示を行います。渡航支援採択者だけでなく、大会に参加される方は、

現地でのサポートをよろしくお願い致します。そして、次号NL70号では、紙面上で大会の様子を報告する予定です。セッションの開催報告等、記事を執筆頂ける方は、広報委員会メンバーにお声がけ下さい。広報委員会からご執筆をお願いすることがあるかと思いますが、ご協力の程よろしくお願い致します。

日本サンゴ礁学会広報委員会

編集後記 Editor's postscript

NL中にもアナウンスがあるように、今年は6月にICRSが開催されます。とても楽しみなのですが、同時に、ああ、産卵があ…とも思っています。次回はぜひ産卵シーズンを外してほしいと切に願っています。

編集担当 磯村



日本サンゴ礁学会ニュースレター [2016年4月]

Newsletter of Japanese Coral Reef Society No.69

2016年4月25日発行

- 編集・発行人 / 「日本サンゴ礁学会広報委員会」
- 梅澤・Agostini・井口・磯村・栗原・酒井・鈴木(蒙)・高野・中嶋・浪崎・樋口・本郷・安田・湯山
- 発行所 / 日本サンゴ礁学会 ● 事務局 / 茅根創 <kayanne@eps.s.u-tokyo.ac.jp>
- 〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻 Fax: 03-3814-6358